

SSKP

# 船橋障害者自立生活センターニュース

2001年1月29日発行 第36号



編集：船橋障害者自立生活センター事務局

〒273-0011 船橋市湊町1-6-12

郵便振替「00140-9-609088」

TEL：047-432-4554 / FAX：047-432-4565

URL：http://www.cil-funabashi.org/

E-Mail: cil-funabashi@cil-funabashi.org

あけまして  
おめでとう  
21世紀  
ございます

激動の世紀と言われた20世紀が終り、新しい世紀が幕を開けました。

私たちのセンターも活動を正式にスタートしてからこの秋で10年目に入ります。

法人化に向けた取り組みや財政の安定化などまだまだ課題が多く、前途は容易ではありませんが、事務局スタッフ一同力を合わせて前進していきますので、皆様のご支援とご協力を引き続きよろしくお願いいたします。

# NPO法人化に向けた臨時総会のお知らせ

当センターではNPOの法人格の取得に向けた取り組みを続けています。

去る12月10日には、船橋市勤労市民センターにおいて総会を開きました。

ほとんどの議案は承認をいただくことができました。



しかしながら、役員名簿など一部の議案で不備があり、下記の要領で再度総会を開いて改めてご承認をいただくことになりました。

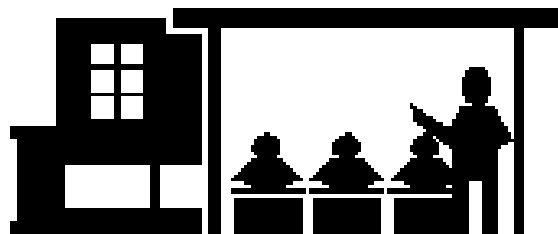
正会員の皆さんには、返信用の葉書を同封させていただきましたので、必要事項を記入してご返送いただきたいと思います。

なお当日は、議事に引き続いて介助派遣についての説明会も予定しておりますので、ぜひご出席くださいますようお願いいたします。

## 記

日時：3月4日(日) 13時30分～16時

場所：船橋中央公民館 第2集会室



## 2000年度介助講習会開催のお知らせ

小正月も過ぎて普段の生活が戻ってきました。今年こそお互い良い年にしたいものです。

さて、このたび当センターでは下記の要領で介助講習会を開催いたします。介助経験の有無に関係なく、ふるって御参加ください。

### 記

- 日時：2月14日（水）、21日（水）、3月7日（水）全3回  
PM 1：30～4：00
- 場所：中央公民館（体レク室）



### プログラム

第1回 2月14日（水） 車椅子での介助方法

講師：船橋市福祉サービス公社業務課長 高山 行夫

- ① 車椅子体験
- ② 障害者を乗せて実際に押してみる

第2回 2月21日（水） コミュニケーション・トレーニング

講師：今井くみ子

- ① 言語障害のある障害者の体験をじかに聞く。
- ② 言語障害のある障害者と会話する。

第3回 3月7日（水） 聴覚障害者への理解とコミュニケーションの問題

講師：船橋市聴覚障害者協会会長 篠崎 道雄

受講締め切り：2月6日（火）

受講希望の方は電話またはFAXで受け付けますので、よろしく願いいたします。

T e l : 0 4 7 - 4 3 2 - 4 5 5 4

F a x : 0 4 7 - 4 3 2 - 4 5 6 5

## 第2回バリアフリー写真展が行われました



昨年秋、私たちは船橋市役所でバリアフリー写真展を行いました。それに引き続き第2回目として、なんと21世紀の幕開け早々1月4日から7日まで船橋市民ギャラリーで写真展を開催しました。

松の内ということもあり来場者はそれほど多くありませんでしたが、アンケートの中には、展示を見て障害当事者の目線でものを見ることの大切さがわかった、目から鱗が落ちるような衝撃を感じた、と書いてくれた人もおり、それなりの意義は十分あったと思います。

ただ、もっと多くの人が集まりやすい時期に広範囲にお知らせして開催すればよかったという反省点はありますが。

開催中カンパをいただいた方々にお礼を申し上げます。



## ホームページアドレスが変わりました

2000年10月にSo-netからASAHIネットにプロバイダを変更しました。それとともなってホームページとメールのアドレスも変わったのでお知らせします。

また掲示板も開設しましたのでどんなことでも結構ですからどうぞ気軽に書き込みをしてください。

新アドレス

HP アドレス：<http://www.cil-funabashi.org/>

メールアドレス：[cil-funabashi@cil-funabashi.org](mailto:cil-funabashi@cil-funabashi.org)

## 故 高野博之さんへ

山本 明

これからが春の盛りになるという頃  
あなたは僕たちの前に現われ、  
そしてその年のうちに、僕たちの前から  
突如、永久に姿を消してしまわれた。  
余りにも短かったあなたとの月日が  
いまになって悔やまれるのはなぜか。  
電動の車椅子に乗ってから、あなたの行動範囲も広がって  
顔の表情さえも明るくなって、それが全身に満ち溢れるかのように、  
毎日、海神の自宅から僕たちのところへ来て  
面白い話しをしていたあなた。  
広がったのは行動範囲だけでなかった。  
あなたの世界も広がりを見せ、  
公園の中に車椅子用のトイレの設置を市に対して  
要望するまでにいたった。

あなたにとっては、まさにこれからが春の盛りになるという時  
自立への快進撃を始める矢先、急逝された  
僕たちはそれだけに悔やまれてならないのだ。  
初冬のいま  
外はつめたい風が吹いている



## 《障害者とピア・カウンセリング》

### 【私の歩んできた道】 第1回

講師：安積 遊歩

○司会

ありがとうございます。今回のテーマは「障害者とピア・カウンセリング」です。ピア・カウンセリングは、私たち船橋障害者自立生活センターでは、短期集中講座、長期講座という形で毎年講座を行っております。あと、個人ピア・カウンセリングという業務をしております。ピア・カウンセリングは最近では、生活支援事業の業務の1つとしてとらえられるようになりました。ここでいろいろピア・カウンセリングが広まったというふうになっていますが、まだ健常者の中で、ピア・カウンセリングとは何だろうとか、そういうふうにいる人も何かかと思えます。今回は、そこで安積遊歩さんに来ていただきまして、ピア・カウンセリングのことを話していただきたいと思えます。では安積遊歩さんお願いします。

○安積

こんにちは。東京の国立からやって来ました、安積遊歩と申します。障害者とピア・カウンセリングということで、ピア・カウンセリングとは何かということなどを、ピア・カウンセリングの有効性ということを中心にお話を進めていきたいと思えますが、その前に私自身の紹介をさせていただきたいと思えます。

私は福島県の福島市というところに生まれまして、生後40日目に先天性の骨形成不全症という障害が幸か不幸か診断されまして、それ以後20回以上骨折、それから8回ぐらい手術をしたり、医療とは何かと縁の切れない日々を、13歳まで送ってまいりました。13歳のときに何が起きたかと言いますと、自分でこの現代医学というものについて非常に疑問が大きくなりまして、二度と、と言いますか、私の体は私がコントロールする、自己管理する、自分で自分の体をみていきますということをお医者さんに申し渡しまして、それ以後、整形外科の門は車いすが欲しいときにしか行かない、車いすの診断をしてもらうときに自分から行ったくらいで、ほとんど治療とか、養育へのリハビリというところでは、もう整形外科の現代医学の門く

ぐっていません。

というのは小さいとき、生後40日目で診断されましたので、私はさっき「幸か不幸か」と言いましたけれど、非常に障害によっては不幸だ、不幸なことにと言いたい気持ちがあるんです。どういふことかと言うと、まだ治療法も原因も、ほとんど全く明らかでない障害なんです。遺伝子のレベルのDNAの問題だろう、ということは明らかになってきていまして、たくばく質のコラーゲンというところの代謝異常というようなことを言われていますが、要するにまだわかっていない。これからも、もしかしたらわからなくてもいいところもあるかもしれない、この障害なんですけれども。でも、やはりこの社会が障害を持った人、そういう人の存在を個性的に認めていないために、先天的に障害を持った私は健常者の体に合わせなければならぬ、という優先思想にすごくからめとられていたわけですね。

どうなっていったかという、40日目から、診断されたときから、骨が弱いだろうから、骨が弱いんだったら少しでも強くした方がいいだろうということで、カルシウム剤の投与。まあ、それはいいと思うんですけれども、女の子より男の子の方が骨が強いだろうから男性ホルモンでも注射してみようということで、一日置きに男性ホルモンを注射で、注射器で投与されるということが2年間ぐらいにわたって続いたんですね。記憶としてはほとんどありませんが、でもやはり体が覚えていると言いますよ、男性のお医者さんたちに対する、中年の男性に対する非常な拒絶感というか、嫌悪感をずっと感じてきました。だから、お医者さんでない方であっても、中年の男性というだけで嫌だと思ってしまうたりということが20代後半ぐらいまで続きまして。

やはりそれは、このピア・カウンセリングであり、ピア・カウンセリングの理論に私が導入しました、再評価カウンセリングというのを、後から詳しくお話しますけれども、それを実践する中で、使っていく中で自分の人生を振り返っていったときに、



中年の男性に対する嫌悪感なり拒絶感なりというのは、その、40日目の診断されたときの、何て言うんですかね、当たるも八卦、当たらぬも八卦のような治療法から始まったんだ、ということが認識できていったわけなんです。今、当たるも八卦、当たらぬも八卦と言いましたけれど、本当に星占いというか占いの要素が大きい治療法だったわけです。

結局2年目にも骨が強くなった兆しもないので、2年目に第1回目の骨折が歴然としたものが、病院で診断されたものとしては、2年目に骨が弱いよだから私の注射を投与したら強くなるだろうということで、私3人きょうだいですから母親が兄の手を引き、私をおぶい、だんだんおなかが大きくなっていく、妹がおなかに入っておなかが大きくなっていくような本当につらい状況の中を必死に、あのころはバスでも1日1本なんていうところに住んでいましたから。そういうところを歩いていってもかわらず2年目に「何の効果も見られないよだから、やめましょう」という、その一言でやめたわけなんです。

一体、効果のないことを2年間続けて、私が。注射って赤ん坊にとっては本当に怖いものですから、脅威的なものですから、今は生命の別状が差し迫ってない限り、もう注射というのはほとんど赤ん坊にはしなくなりました。それはやはり40年前に私が、44歳になりますから、44年前に命がけて私が「やめろ」と体を張って叫び続けた、そういうことの1つの結果があって、今そういうふうな子供に対してむやみにやたらな治療をしないという、少しは医学の中の良心が回復してきたと思うんですけれども、それくらい私に対して行われた医療が、言葉を飾らず言えば残酷だったと、そう言えると思うんですね。

そういうことがあって私は、医学というものに非常に不信感を、子供ながらにどんどん育ててきて、特に現代医学ですね。13歳のときに特にそのとき施設にいたものですから、療育園といって、渡り廊下1つで養護学校とつながっている、どちらかというと病院が中心の施設にいたんですね。病院の中心の施設の中で何回目か、8回目か7回目の手術を、7回8回6回ぐらいいかな、骨の手術を繰り返していったわけなんです。

どうしてそれでこれはやばいと自分で感じたかと言うと、とにかく小学校5年のときに養護学校、病院の施設に入ったんですけど、小学校4年生までは普通の地域の学校に親と一緒に通っていたこともあってか、地域の学校に親の介添えつきで通うということが正しいとは全く思えませんが、あの当時はそれですから通わせてもらえないというような、まるで教育が権利ではなくて、施しとお情けのようなところに障害を持った子供に対してはありましたから、その親が、自分が面倒みますからということでようやく通学していたわけですけども、そういう事情もあってか、親がいるところでは学校の中で骨折したためしかなかったんです。でも、親がいなくなった障害児のための施設、養護学校というところに行きましたら、途端に何度も骨折させられて。やはりなぜしたかという結局子供の自己決定権、私たち自立生活センターというのは、自立は何かということをやっと追求してきたセンターなんですけれども、船橋の自立生活センターを初めとして、1つの自立は何かということの中に自己決定権、自己選択権というのが非常に大きなものを占めています。本当に自立というのは、経済的に自分で稼いで自分の生活をしていくことというのではなくて、自分が何が着たいか、何が食べたいかというようなことに始まる自己選択、自己決定権を行使することなんだ、ということ私たちずっと言ってきたんですが、その始まりでしょう。私の人生ではその始まりともいべき自己決定権を行使した記憶が13歳のときなんですけども、自己決定権によって、私はそこを出るということを決意したわけです。

障害児のためにつくられたはずの施設や療育園で骨折を繰り返させられる。つまりそれはなぜかと言うと、障害を持っている子の学校なのだから、みんなに特別な扱い方、特別な対応ができないということで、同じように朝礼のときにも並ばなきゃいけない。同じようなことを、つまり本当に地域の学校、普通の学校と同じですけど横並びに整列しなきゃいけないということと言われて。私は骨がもともと折れやすいんですから、普通の学校に行ったときには朝礼のとき、並ぶときには全員が静かになるまではどこかで待っていて、全員が座り込んだときにちょっとやって来て座る、ということ

をしていましたけれど、あるいはもっと危ないなど感じたときは、もう先生が教師側の席で見ているということをしてきたわけです。が、養護学校に入った途端、自己決定権というか、選択権を無視されまして、同じ障害児なんだから一緒に並びなさいということで、私はやはり松葉づえの人や脳性麻痺の不随意運動のある人の中に立って、立ち上がって。これが不思議なところですが、要するに養護学校というのは、健全な障害のない人の体になることが一番ゴールというか目標のところがありますから、少しでも自分の体に心地よく自分の体に優しく生きる、ということが許されないようなところがありまして。もう本当に私が「朝礼には並びたくない」というふうに言いましたところ、「そんなわがままな生意気なことは言ってはならない」ということで、朝礼に並べさせられまして。案の定というか将棋倒しの中、一番下になりまして骨折したり。

あるいはプロ意識というのは本当に困ったものだと、ときに思うんですけども、医師や看護婦が、私が「痛い」と、手術の後「まだ骨がしっかりついている気がしないから、痛いかから歩きたくない」と言っているにもかかわらず「もう、立って訓練しなさい、歩きなさい」ということを、何度も言われまして。もう本当に脂汗を流しながら痛くて、痛くて何でこんなに痛いのには歩かなきゃならないのかと思いつながら歩かされて、それで余りにもちよつとひどい歩き方なのでレントゲンで撮ってみようと思われたら、やはり手術したところがまた開いていたみたいなことが、そういうことが数限りなくありまして。

結局自分の体を自分で信じて、つき合うのは自分しかいないわけですね。ですからやはり自分の声を聞くということが一番大事な作業なわけです。心の声であり、体の声であり、それを聞くということを13歳のときに自分で決断しまして。そのころ医師は今度は脊髄のところが激しくなっていてその当時、足の方の手術はもう8回もされまくって、これで絶対いやだという決断がつかまりましたけど。脊髄にも施設が触手を伸ばすというか、興味と関心を持ち始めてきていましたから、これは大変なことになると思っています。

私の友人の1人は脊髄の手術をされて、手術す

る前は歩いていた人が、もう寝たきりになりました。今、重度の本当の最重度の障害者になって別の施設に送られて生活していますが、そういう仲間、友人を目の前に私がちゅんと見ているにもかかわらず、手術は成功させるからやってみないかということで非常な、お誘いがあったんですが、13歳のときに「いえ、結構です」と言いました。私はもう二度と整形外科の治療とか、リハビリにかかる気はしませんということ、子供ながらにちよつとした言葉で言いましたところ、一瞬驚かれました、認められたというよりは驚かれ、あきれられ、放置されたというか、放されたという感じだろうと思いますが、そこを出ることができたんです。それ以後は、自分で自分の体を見つめるということを決めましたから、東洋医学や自然医学や民間療法やいろんなものを駆使しましてとかやりまして、今でもほとんど整形外科の、全く自分のことでは行っていません。

でもやはりここがピア・カウンセリングというところでお話したいところですが、人間というのは、「この人たちは自分のことを理解していないから、この人たちとはつき合いたくない」というふうにも思っている、本当の本当の本当のところは、やはりすべての人と仲よくしたい、できるならば本当はすべての人と仲よくしたい存在なのだということを確認しています。差別や抑圧があるからもうこの人たちとはつき合わずにいたいとか、この人たちとは理解し合わなくてもいいとかいうふうにお互いに突き放すのではなくて、差別や抑圧があるからこそ、だからこそ、それをわかりやすくつき合って語り合って、そこを越えていく試みをしたい存在、それが人間なんだと思うんですけども。

私も28歳のときにアメリカに行きまして、半年間生活した中で、このピア・カウンセリングというのに出会って。そうした思いに少しずつ力を得まして、30代のときにはこの理論のもとに、私がこの理論のもとに使っている再評価カウンセリング、またの名をコウカウンセリングというものに出会いまして、これは東京で出会ったんですけども、この考え方を取り入れて、ピア・カウンセリングを日本全国に普及すべく活動を続けてたわけなんです。それらの考え方にある、やはり人と人とは、本当にできることならすべてわかり合いたい、



近づきたい、つながり合いたい存在なのだということなんです。それにまるで本当に30代ずつとそのことが、思いが、確信が本当かどうかということをも自分も、また話を聞いてもらいながら、ピア・カウンセリングというのはお互いに話を、つき合える関係をいっぱいつくっていきこうとしていますから、話や気持ちを。だから自分もまた聞いてもらえる時間を持ちながら、その確信に本当に力をつけてきたわけなんですけれども。

その結果そういうふう思うんですけれども、結果ともいうべき、もう一度整形外科の人たちと向き合わなければならぬような局面が、絶対的に避けては通れないという局面が40代のときに、私今44になりますけれども40歳のときにやって来たわけです。というのは、39歳のちょうど10月18日でしたから、5年前の3日ぐらいの日なんです。何と私は2年間、さっき言いましたように、男性ホルモンの投与を受け続け、それだけではなくその結果を毎日1回ごとに見るくらいに、恐ろしいほどのレントゲン撮られていたものですから、もう本当に不妊症というか、レントゲンの、放射線ですからX線のせいで、すっかり自分は不妊症になったと思って信じていたわけなんです。20ぐらいのときから恋人が何人かできまして、避妊も全くなかったにもかかわらず、妊娠したためしがありませんでしたし、とにかくX線が、レントゲンの枚数が余りにも膨大で医大病院の棚が落ちたというぐらいすごい数で、もう本当に考えられないような医療を受けていた時代ですから、自分が不妊症だとかたく思っているでも何の問題もないくらい量だったわけなんです。

だから、でもそれでも13歳のときにキセイ生活を離れまして、自分の体をみるということはどういうことかという、まず、治療法のあり方を、例えば風邪をひいても、私は40度の熱が3日間4日間続いても自分で治すほどに民間療法でいろいろあるんですけど、梅干し番茶、梅干しに番茶を入れておしょうゆは何さじ入れるってこと、しょうがをちょっとすりおろしてとか、いろんなこういう風邪にはこんなふうな療法とか、民間療法とか東洋医学とか、今は時々はりに通っていますけれども、ありとあらゆることを学んで。そしてやはり一番自分の体質改善というか自分の体を変えるた

め、改善するための始まりになったものは、多分19から20のときには完全にベジタリアンといひますか、お肉を食べないということも決断して。玄米を食べてお肉は食べないでお砂糖も極力減らしていくということをして20年間にわたってやり続けたんです。お肉は食べなくても、お魚や卵や牛乳は食べていましたけれども、そのうちの1年、あるいは2年近く続いたでしょうか、ありとあらゆる動物性たんぱく質はやめるといひくらい、普通の食事を何とも考えずに送っている方からみれば、ちょっと驚かされるような禁欲的な食事スタイルもあって、もう本当に体質改善の効果があつたのか、最後の40代になると。

4～5年前からは父が肺がんになりまして、父はもう本当に戦時中のすさまじい飢餓の時代を中国とシベリアで体験し、そして日本に帰ってきてからも非常に高度経済成長を自分の体で作り出した企業戦士の1人でしたから、すごいひどい思いをしてきたものですから、私が肉は食べないとか、玄米を食べようとかいうことに全く耳を貸さない人ではあつたんですが、自分が肺がんになるに及んで、それも医学の問題ですね。何の告知をしないものから、彼は本当にいろんな不安や悩みも抱えたと思います。私も一緒に住んでいれば、父から告知をするなどというふうに言われていましたけれど、多分そこに反対して、やはり父を信じてきちんと告知をして、どう生きるかについて話し合えたと思うんですが、そのとき私は東京に、父は福島にいましたから、父と一緒に住んでる母を一番尊重しなければいけないと思ひまして。母は一度告知をしないという方針に、彼女も本当に三つ子の魂百までといひか、天皇制の時代に教育を徹底的にされてきた人ですから、権威的な人の言うことに、「だってそれはおかしいんじゃないんですか」といひうに言えない人でしたから。もう本当にだからこそ私を医師に預けまくつたということもあるし、またさらに父に対しても告知をせずにそういうやりとりがあつたんです。

でも、また最後に父は、私はどんどん彼がやせていくのに見かねて、玄米を食べないまでも食事療法なんかをしないまでも、そのころ聞いてきた飲尿療法、おしっこを飲むといひ療法を試したら、とにかく何か奇跡が起こつてほしいということを考え

ていましたから、それをやってほしいというふうに提案したんですね。そしたら、もう大正9年生まれ男性が、「命が惜しいからといってそんな自分のおしっこなんてのはまっぴら御免だ」という反論が返ってきましたから。それもわかってたことなので、まず自分の体で実験をすることにして、飲尿療法なんかも含めて、ピアバン温圧とか、ありとあらゆることを最後には父にやってあげました。父は結局最後は血尿の出た、真っ赤に血が混じったおしっこでも飲んでくれましたので、今から思うとそれが幸いしたのかなと思うんですが。

ここだけはうちの母が偉かったと思う点なんですけど、うちの母は告知はしないで医師と一緒に黙り込んだんですが、ただ一つ医師に逆らったのは、抗がん剤の投与はしてほしくないということをやったんですね。抗がん剤というのはもちろん自己選択と決定ですから、それを使うと決断すればそれはそれでいいと思うんですけども、母は抗がん剤を使った親類のおじや近所の方が、抗がん剤の副作用ですさまじい苦しみ、顔の状況が変わるほどの苦しみを、あと、毛が抜けるとかいうのを見ていましたので、どうせなくなる命であればもう安らかに死んでほしいということとか、あと丸山ワクチンなんかもやりましたので、もう本当に抗がん剤だけはやめてほしいと医師に頼んだわけですが。本当に女、子供の言うことは全く聞かないというか「おまえは自分の夫を殺したいのか」まで言われて、愕然として涙、涙で東京にいる私に電話をよこして、「医師にここまで言われたけど何とか抗がん剤は投与したくないんだけど、どうしたらいい」ということを相談してきました。

私も抗がん剤を使わないという生き方には、もちろん自然医学をやっている立場からみれば大賛成ですからすぐに行きまして。人と話をするときにコミュニケーションをする力というのは、これもピア・カウンセリングの中でやってることですが、本当に自分の意志をわかってほしい、伝えたい、理解してほしいというのであれば、やはり恐れなく、不安なく、相手を信頼して目を真っ直ぐに見て、「私はこうしたい」ということを伝えることなんです。でも、どうせわかってもらえないだろうとか、この人はどうせ私の言うことなんて無視するだろう、

というような気持ちを、恐れをいっぱい回していると、やはり通じないんですね。多分、母はいろんな不安や悲しみを抱えたまま医師に訴えたものですから、医師は聞く耳を持たなかったと思うんですが、私は幾ら専門家とはいえ、その治療の方針を決定できるのは患者であるという確信がありますから、そこについては何も譲る気はありませんから。でも、自分が感謝も込めて、いつも父を診ていただいて本当にありがたいと思っていますということから話を切り出しまして、抗がん剤は私の家族は投与を避けたいと思っていますので、そのように治療をしてほしいということ。もうそうですね、15分か20分ですか、繰り返し、いろいろ彼が言うてくるのを聞きながら、それは本当にそうしてください、思っていらっしゃることは、こちら側としては理解していますと2~3回相づちを打ちながらですよ、「しかしながら」と、いつも言い続けて20分ぐらいたってから彼が「じゃあ、家族がそう言うんなら、私たちも家族が理解しないことをやるつもりはありませんから、抗がん剤は投与しないでおきましょう」というようなことを言ってくれましたね。

結局うちの父は私がこうやってあげたいと思うような、ありとあらゆる民間療法であり、自然医学でありを体に受けながら、だから最後の最後まで激痛で、肺がんの方というのは激痛でモルヒネを打たない限りちっとも安らかにならないというくらいの苦しみを表現なさるそうなんですけども、幸いにもうちの父は、最後の瞬間まで息は確かにありながらも激痛ということ、激痛と闘っているというような感じは一度としてなく、安らかに逝ってくれたんです。

私はだから、自分のやってきたことにある程度の確信は持っていましたが、でも確信の象徴として、子供が自分のおなかにやってくるというのは、それはちょっと思いませんでした。父に勧めた飲尿療法であり、もう玄米であり、ピロ葉の温圧療法とか、そういういろんなものをとにかく自分の体に試した結果なのか、39歳のときに妊娠しまして、5年前のおとといですね、3日ぐらい前か、妊娠がわかりまして、産むかどうかということで本当に悩みました。というのは、幾ら自然医学で自分の体のみてきたとはいえ、やはり私の体が

今の現代医学の助けなしに子供を産めるとは、まるで思えないわけです。だから現代医学と、やはりもう一度協調するというか、連帯しなければいけないのかというところの瀬戸際に立たされちゃうわけですね。やはり立たされまして、それを受けて立つということを決断しまして、子供を産むということを、まあ本当に妊娠頑張れる限り頑張ってみようと思っただけですね。なぜなら、もし産まれない命だったら、本当に流産が多いですし、死産でこともあり得るだろうから、産まれないとまず覚悟をきめているのだったら産まれないということもあるかもしれない。だから頑張れるところまで頑張ろうと思ひまして。

もう一つ思ったのは、でも頑張れるところまで頑張っていて、いざ産まれるとなったときに医者たちがそれに賛成しないようであったら、私の体が受けるストレスはピークに達しますから、医師を選ぶということで、本当に医師を選びました。で、産婦人科のお医者さんに、すてきなさわやかな方に出会いまして、その妊娠の初期から「安積さんの産むことを応援します」と彼女は率直にすぐと言ってくれました。逆に私が余りにも自分の体、命に対する不安で悩んでいることに対して、「もしかしたら安積さん、もう中絶することと出産すること、ものすごくてんびんにかけてない」と言ってくれたんです。「中絶することの方が自分の体や心にとって、軽いと思ってるならそれは間違いよ」というような、正しい情報をくれたんです。私は最終的に決断がついたのは彼女のその言葉ですね。やはりもうすでにいる命ですから、出産しないということを決断したとしても、中絶というやはり手術ですね、これは激痛を伴うだろうし、すさまじい精神的ないろんな葛藤や罪悪感も伴うだろうということを言われました。言われましたというか考えまして、本当に飛ぶことを、決断したんです。

その間というかその前後、それ以後も今でもすけれど、ではどのようにピア・カウンセリングが私の生活に有効で、つまり私の人生を支えてきたかというお話をしながら、ピア・カウンセリングについてお話ししたいと思います。で、私が40代の妊娠の10年くらい前から、1986年なんですけども、第1号のこの船橋の自立生活センターができ

る何年前ですかね、正しくは八王子に第1号の自立生活センターをつくって活動を始めました。それが私がアメリカに行って、ピア・カウンセリングを学んだのが83年、ピア・カウンセリングという言葉を知ったのはそこでなんですけれども。ずっと福島県の方で障害者運動をしてきましたから、ピア・カウンセリングという名前・タイトルはなかったけれども、私たちがやってきたことはほとんどピア・カウンセリングのようなことなのだなという、非常に近い認識を持ちました。アメリカでの半年間で。

アメリカではその自立生活センター、私たちがモデルとして、自立生活センターで研修をしたんですが、ピア・カウンセリングということで、大勢の仲間たちがピア・カウンセラーとして、ピア・カウンセリングの場面に働いていたんです。日本では同じようなことをしていても、ちょっとこう障害を持ってかわいそうな人たちが寄り集まって、ご苦労さまという感じだったんですけども、アメリカでは職業になっていたわけです。私たちがやっていることに行政や地域や企業がお金を出すなんていうことは、福島県の片田舎にいた私には考えられなかったんですけども。だからお金をどうして集めていたかという、街頭カンパ、本当に町に出て私たちの活動にカンパしてくださいというような、街頭カンパしかなかったんですが、アメリカに行ってみたら、なんと街頭カンパなんていうことはだれもしてなくて。している人もいました。でも、その人はまた自立生活センターとか自立生活運動とは全く関係のない、なんかいろんなボランティア活動のカンパ活動をしているのであって、障害を持っているからといって、障害者運動のためのカンパ活動をするわけでもないんだということに不思議な感動を覚えましたけれども。

（次号に続く）

## 事務局の動き

9月	15	中間監査	12	パソコン教室
3	16	ピアカウンセリング長期講座	14	ピアカウンセリング長期講座
5	17	連絡調整会議	19	パソコン教室
7	19	運営委員会	21	ピアカウンセリング長期講座
12	20	成田市ヘルパー養成講座	26	パソコン教室
12	21	パソコン教室		
12	22	県庁		
13	24	千葉工大学園祭	2001年1月	
19	24	事務局会議	4～7	船橋バリアフリー写真展(市民ギャラリー)
26	28・29	生活支援事業職員研修会	9	パソコン教室
27	30	ピアカウンセリング長期講座	10	連絡調整会議
28	12月		11	ピアカウンセリング長期講座
29	5	パソコン教室	16	パソコン教室
29	7	ピアカウンセリング長期講座	16	聖母療育園見学
29	8	連絡調整会議	16	自治労千葉見学
30	10	NPO設立総会	18	ピアカウンセリング長期講座
	11	県社協研修会	19	事務局会議
10月				
2		千葉南病院で出張相談		
3		パソコン教室		
10～27		船橋バリアフリー写真展(市役所ロビー)		
10		パソコン教室		
13～15		ピアカウンセリング集中講座		
13		事務局会議		
17		パソコン教室		
17		ららぽーとへ要望書提出		
17		NHK取材		
19		我孫子市役所来訪		
19		連合「愛のカンパ」贈呈式		
19		杉並区来訪		
21		安積遊歩講演会		
24		パソコン教室		
25		県社協来訪		
28		車椅子ウォーキングフェスティバル		
29		「魔法のランプ」講演会		
30		全身性介護人派遣事業について市と協議		
31		パソコン教室		
11月				
1		NPO申請の打ち合わせで県庁へ		
2		二次障害学習会		
6		NHK取材		
7		パソコン教室		
7		ソロプチミストディナーショー		
9		NHK取材		
9		全連協蔵本氏来訪		
9		ピアカウンセリング長期講座		
10		事務局会議		
11		ライフツール千葉学習会		
13		京成バス来訪		
14		パソコン教室		

## カンパのお礼

前号以降、以下の皆様より温かいカンパをいただきました。厚くお礼申し上げます。（順不同）

堀江 はつ様	入江 栄喜様	井村 美絵様
佐久間 良夫様	森崎 亮様	石栗 利宏様
高木 恒雄様	大橋 和夫様	津久井 大助様
神谷 健様	前田 満子様	青山 利夫様
福元 高明様	渡辺 由美子様	湯浅 寛様
田尾 宜子様	佐藤 達郎様	高野 和子様
石栗 緋紗子様	山村 豊様	杉井 和男様
酒井 志文様	奥谷 道子様	吉野 多喜子様
吉川 様	田沼 敏夫様	柳澤 輝昭様
吉岡 文子様	小出 美智子様	小川 里様
増田 高子様	板橋 富子様	吉田 晴美様
豊島 ひろみ様	総会出席者	成田 泰子様
渡辺 慶子様	瀬能 義辰様	匿名

国際ソロプチミスト  
日本労働組合総連合会

### 編集後記

年末から沖縄へ行ってきました。何よりも印象的だったのは、本土の人は生まれやその他いろいろな要素で人間を区別したがるけど、沖縄の人は自分が差別された経験を持っているので誰のことも特別扱いしない、という現地の運転手さんの言葉。

21世紀もご支援をお願いします。(す)

同封の郵便振替用紙は会費、介助料、カンパなどを送金していただく際にご利用ください。

発行所 東京都世田谷区砧6-26-21  
障害者定期刊行物協会  
頒価 100円